つながろう
CO-OP アクション情報
2011 年 10 月 12 日
第４号

大船渡市の“巡回訪問活動”を継続支援

～被災の痛み知る神戸・ろっこう医療生協が岩手で活動～

仮設住宅の集会所での「お茶っこ会」に集まった方々の血圧を計測する豊山さん（写真中央）。

岩手県大船渡市では、仮設住宅の建設や市による住宅の借り上げが進んだ 5 月より、被災者の避難所からの移行が始まり、8 月中旬までにほとんどの方が仮設住宅などへ移り住みました。現在、1,801 戸の仮設住宅と 585 戸の借り上げ住宅、約 100 戸の公営住宅、その他企業が準備した社宅などで生活を送っています。

そこで重要となっているのが「新しい場所で暮らす被災者の地域社会からの孤立の防止」です。市では、被災された方々の入居先を巡回訪問し「健康調査票」の配布回収を通じた健康状態の確認やコミュニケーションに努めています。

ろっこう医療生協では、7 月よりこの巡回訪問活動に参加しています。きっかけは、同生協灘診療所の医師である千葉誠さんが、震災直後より被災地支援を行なってきたという“縁”と、「阪神・淡路大震災からの復興を果たした方々に、支援を通じ大船渡を勇気付けてほしい」という地元の医療関係者からの声でした。看護師１人とケアワーカーなど事務系職員１人の計 2 人を 1 週間交代で岩手に送り、全国の自治体や県内の多岐に渡る専門性を持つメンバーで構成される支援チームに参加、活動しています。

被災されたお宅を一軒一軒訪問していく。

心のケアは緊急課題

巡回訪問では、「港には、心臓がドキドキして近付けない」「食欲が無くなり、7 キロ痩せた」といった声が多く聞かれ、心のケアの必要性が強く感じられます。日々診療に取り組む千葉医師も「ここまで気丈に頑張ってきた人が、心のバランスを崩すケースが目立つ」と述べています。そうした方々を見つけ出し、受診を促す機会となる巡回訪問の役割は、いっそう重要なものになりつつあります。

◆神戸が受けた支援の恩返しもしたい

ろっこう医療生協
塩江剛氏（左）
豊山紀子氏(右)

8 月以来 2 度目の参加となる主任介護支援専門員の塩江剛さんと、阪神・淡路大震災では約 4 ヵ月の避難所生活を経験した看護師の豊山紀子さん。「何かできないかと悶々としていたとき、この活動の話が持ち上がりました。私自身は被災していませんが、神戸に住む者として受けた支援に対する恩返しもしたかった」（塩江さん）。「被災された方が涙ながらに話されるのを実際に見ると、やはり辛い気持ちになります」（豊山さん）。お二人が神戸から来たことを知った被災された方が「あの時は大変でしたねえ。（長田区で）大きな火事が起きて…」と気遣いの言葉をかけられる場面も。

ろっこう医療生協からはこれまで延べ 20 人以上の職員が岩手を訪れており、年内は支援を継続する予定とのことです。